



大学ソフト部指導にやりがい

2009年にルネサス高崎の総監督を退任してから、縁あって、東京国際大(埼玉真)女子ソフトボール部で指導している。ともに五輪を戦った教え子の三科真澄が監督で、私は総監督の立場からフォローしている。大学生の指導は初めてだが、新たな発見も多く、大きなやりがいを感じている。

今月10日は、高崎市の自宅から車を飛ばして坂戸キャンパス総合グラウンド(同県坂戸市)へ向かった。直近の試合で零封負けを喫したチームを激励し、30日に岩手県で開幕する「全日本大学女子ソフトボール選手権大会」に向けて活を入れるためだ。

「おとといの試合はどうでした? 何がいけなかったと思う?」。30人を超える部員に問いかけると、ぼつりぼつり

ソフトボール元日本代表監督、NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長

宇津木 妙子 * 毎週日曜日掲載



ミーティングでは、ソフトボールだけでなく、授業や就職活動などの話もするようにしている(10日、埼玉県坂戸市の東京国際大で)

と反省の言葉が返ってきた。消極的な打撃で見逃し三振も目立ったうえ、守備にもミスが出たという。

ミーティングでは、学生にどんどん質問をぶつけ、みんなの前で意見を言わせるようにしている。社会に出たら、

自分の考えを相手にしっかりと伝えなくてはいけない場面ばかり。「ハイ」「ハイ」と黙ってうなずいて、分かったふりをしていただけでは絶対に通用しない。ソフトボールがうまくなるだけではなく、そういう人間教育も大切にしたいと思っている。

授業や就職活動も、心配の種になる。実業団チームで社会人を教えていたときにはなかった経験だ。「練習の厳しさを単位が取れない言

い訳にはいけないよ」3年生はもうすぐ就活だけ準備は進んでいるか?。こまめに声をかけ、時に厳しくクギを刺すことだってある。みんな素直で一生懸命だから、教えるほうも「何とかしてやりたい」と熱がこもる。

卒業後は、多くの学生が、企業や団体の一構成員として働くことになると思う。心がけてほしいのは、常に「聞く耳」を持ち、自分の頭で考えながら行動することだ。東京国際大ソフトボール部で学んだことを生かし、彼女たちが立派な社会人として羽ばたいてくれることを願っている。

学生の成長を間近で感じられるのも何より楽しい。頼りなかった下級生も、4年生になるとコロッと顔つきが変わるから不思議だ。最上級生の自覚が出るのだろう。立派な「お姉ちゃん」になって、先輩をたくましく引っ張ってくれる。こうした伝統を何より大切にしたい。

